



## 佳作 病気が教えてくれたこと (匿名希望)

8年前、右手に力が入らず、声が出なくなる等、脳卒中のような症状が頻回におこるようになり、精密検査をして頂いたところ、進行性の脳の希少難病 = 「もやもや病」である事が判りました。

指に軽い麻痺が残ったものの、見た目は元気そのものに見える為、脳外科の待合室で「何の病気？どこが悪いの??」等、質問攻めにあい、又、病名から「心の病」と勘違いされ、「気持ちか、「もやもや」しているの？」等、病気の説明には随分と苦労しました。

先行きの見えない不安から、母に愚痴をこぼし、涙する事もあり、私の前では常に明るく振まっていた母が、「代われるものなら代わってやりたい・・・」と知人の前で泣き崩れた事を後日知り、自分の事ばかり考えていた自分に落ち込み、涙が止まりませんでした。

爾来（じらい）、自分の病気と真剣に向き合わねば、と病気について猛勉強の日々が続きました。病気がある程度落ち着いた頃、難病を突然告げられ、戸惑っておられる患者さんの相談にのらせて頂く機会が増え、落ち込んでおられた患者さんが徐々に明るさを取り戻された時の嬉しさは忘れません。

病気になり出来ない事も増えましたが、こんな自分でもまだやれる事があるのだと生きがいを感じるようになり、正に患者冥利？につきます（笑）。



発症して8年。病気を介して様々な出会い（医療関係者の皆様・同病患者さん）があり、わが事のように病気を案じ、優しい思いを寄せて下さった人々との交流を深めていく事が出来、心温まる思いが致しました。

また、病を得たことにより、一見「元気」そうに見えても、病気や障害を持っていらっしゃる方の存在を知り、病気になって初めて気づかされた事も多々ありました。想像力に満ちた思いやりのある社会は、人の心を優しく、豊かにしてくれます。これは病気に限らず、すべての事に通じるものだと思いますし、そのような社会であって欲しいと願ってやみません。

「いつでも、どんな時でも、やれる事はある。」

これは発病当時市長をされていた方のモットーで、私も大好きな言葉なのですが、闘病する中でこの言葉の意味を考えた時、どのような状況下にあっても、その中で自分に出来る事を探して生きていけばよいのだと解釈しています。今後も病気のサインに気をつけつつ、上手く病気と付き合っていこうと思います。

最後になりましたが、家族や義父母をはじめ、支え励ましつづけてくれた方々に心より感謝の意を捧げたいと思います。

